

ALS進行 4割抑制

発症1年内 徳大治験

ALS 脳からの命令を筋肉に伝える運動神経細胞が侵される難治性の神経疾患で、国の指定難病。発症のメカニズムで分からない点が多い。発症すると、全身の筋力が低下する。次第に呼吸ができなくなり、3〜5年以内に死に至るケースが多い。1年間の有病率は人口10万人当たり5〜7人とされ、国内の患者数は約9千人、徳島県内は約80人。治療薬として平均余命を約90日延長する内服薬「リルズール」と、症状の進行を抑制する点滴剤「エダラボン」の2種類が承認されている。

の抑制効果で、生存期間や人工呼吸器装着までの期間が約600日延長されることも期待できるといふ。重篤な副作用はみられなかった。徳島大によると、治験に協力した大手製薬会社エーザイが薬事承認に向けた手続きを検討している。

メチルコバラミンを巡っては、徳島大やエーザイを中心としたグループが2006年から約8年間、発症3年以内の患者を対象に治験を実施。全体では目立った効果が確認できなかったが、発症1年以内に限ると50%投与のケースで進行を平均45%抑えられることが示唆されていたため、今回の治験で確認を試みた。徳島大病院を主管理施設として全国25施設で17年11月から20年3月まで発症1年以内の患者128人を対象に実施し、徳大病院は最多の17人を対象とした。50%投与を週2回、約4カ月にわたって筋肉注射するグループと、プラセボ（偽薬）を投与するグループに分け、症状の進み方を比べた。

梶特命教授は「従来の薬より大きな効果が確かめられた。発症後早い段階で投与できれば、患者がより長く有意義な時間を過ごせる可能性がある。薬事承認されれば患者にとって画期的な治療法になる」と話した。(南志郎)

体が徐々に動かせなくなる難病、筋萎縮性側索硬化症(ALS)を発症してから1年以内の患者にビタミンB12の一種「メチルコバラミン」を多く投与することで、症状の進行速度を約4割抑える効果があることを、徳島大の梶龍児特命教授(脳神経内科)らの研究グループが明らかにした。既存薬より2倍ほど高い抑制効果を実験で確認しており、薬事承認されれば患者にとって朗報となりそうだ。梶特命教授らが徳島市内で記者会見して発表し、米医師会の雑誌「JAMA ニューロロジー」最新号に掲載された。

ビタミンの一種 大量投与



梶龍児特命教授

メチルコバラミンは、末梢神経障害や貧血の薬として使われている。マウスを使った実験などでALS治療に効果が見込めることが

以前から指摘され、高用量を発症早期の患者に投与すると進行を遅らせることができることとみられていた。今回の治験では、常用量の100倍に相当する50mgの投与を続けた患者は、手足の筋肉を中心に進行を平均43%抑制できた。

既存の点滴剤「エダラボン」に比べて1.5〜2倍